

平成23年度

国際理解教育研究大会報告書

第19回岡山県国際理解教育研究大会

岡山大会

「世界の中の日本，学び合う国際理解教育」

～私にもできる国際理解教育～



期日：2012（平成24）年1月25日

会場：岡山ふれあいセンター

岡山市中区桑野715-2

主催： 全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会
岡山県国際理解教育研究会

後援： 岡山県教育委員会 津山市教育委員会
岡山市教育委員会 倉敷市教育委員会
(財) 福武教育文化振興財団

第19回 研究大会



報告書



平成23年度

第19回岡山県国際理解教育研究大会

開催要項

1 日程 平成24年1月25日(水)

13:30 14:00 14:15 14:45 15:15 15:30 16:30

受付	開 会 行 事	実践報告 I	実践報告 II	情 報 提 供	講 演 ワークショップ	閉 会 行 事
----	------------------	-----------	------------	------------	----------------	------------------

2 講演 **「教室から世界を知る授業づくり」**

ワークショップ

講師 越宗 ゆう子さん(JICA岡山 国際協力推進委員)

3 実践報告

	主題	発表者
14:15 ~14:45	「よりよい自分や集団をめざして、 進んで思いを伝え合う子どもの育 成」 ~いつでも、だれでもできる国際理 解教育をめざして~	坪田 留美教諭 (岡山市立平井小学校)
14:45 ~15:15	「身近な外国を知ろう」 ~6年 総合的な学習~	山本 和宏教諭 (備前市立伊里小学校)



4 その他 ○情報提供（15：15～15：30）

全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会から、国際理解教育の現状や、海外日本人学校・補習校の様子などをお知らせします。

○展示

日本人学校派遣者が海外から持ち帰った物や写真を展示します。

○日本人学校へのアプローチコーナー

日本人学校に派遣を希望されている方、お気軽にご相談ください。

5 地図



目 次

1	研究大会を終えて（会長挨拶）	・・・・・・・・・・	1
2	講演ワークショップ「教室から世界を知る授業づくり」	・・・・・・・・・・	2
	講師 越宗 ゆう子さん（JICA岡山 国際協力推進委員）		
3	平成23年度研究課題	・・・・・・・・・・	6
4	実践報告	・・・・・・・・・・	8
	坪田 留美教諭（岡山市立平井小学校）		
	山本 和宏教諭（備前市立伊里小学校）		
5	情報提供	・・・・・・・・・・	20
	全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会	会長 滝 多賀雄	
6	各国の紹介・展示コーナーなど	・・・・・・・・・・	25
8	あとがき	・・・・・・・・・・	45

研究大会を終えて

岡山県国際理解教育研究会 会長 都築 勉
(岡山市立富山小学校長)

第19回研究大会を関係各位のご尽力ならびに岡山県教育委員会や岡山市教育委員会のご後援・ご列席のもとで成功裏に終えることができました。皆様、たいへんありがとうございました。また、全海研の滝会長にわざわざおいいただき、派遣教員の帰国後の仕事についてご示唆をいただくこともできました。熱くお礼申し上げます。



従来、この研究大会は、学校を公開して開催してきました。しかし、今年度から会員組織を備前・備中・美作の3地区の支部として改編したことに伴い、大会の持ち方を変更しました。学校を公開しての開催する年と実践報告を中心とした研究会として開催する年とを交互に開くことにより、県内全域で国際理解教育を広めることをねらいとしています。今後、各地区での会員研修会を活性化することとあわせて展望を持って取り組んでいきたいと思えます。

さて、国際理解教育の必要性については、今年度の小学校学習指導要領でもまた、次年度の中学校学習指導要領でも重要な課題としてうたわれているところです。現に、世界はますます狭くなり、福島原発事故もイランの核開発問題に対する欧米の経済制裁の動きもユーロ危機もそれがたちどころに世界中を巻き込む様相を呈しています。知識基盤社会といわれるようになった社会の構造的な変化がこのような現実を作り出しています。だからこそ、将来を担う子どもたちには「生きる力」の育成が重要なのであって、古くから言われてきたように「地球規模で考え、足下から行動する」子どもの育成がこの国の将来を左右するともいえるのです。

確かに表層では、噴出する諸課題に政治は有効な手を打てず、世界は混沌としているように見えますが、明らかに時代の流れは競争から協同へとシフトしています。国際理解教育が世界の現実を学ぶことや、世界が互いに依存しあっていることを学ぶことや、コミュニケーション力を重視することも、すべて、この地球の諸課題を諸国民が協同して解決するための力となるからです。そのような場で活躍できる人材の育成があらゆる学校で求められています。

校内研修の直接的な課題とするしないにかかわらず、国際理解教育は今後ますます重要性を増してくることから、教育行政や学校の理解を深めていく必要があります。なお、今年度も8月に名古屋市において全国海外子女教育・国際理解教育研究大会が開催されました。また、広島市において中国地区国際理解教育研究大会が開催され、中国5県からそれぞれ実践報告を持ち寄って研究協議が行われました。本大会の成果を来年度の中国地区松江大会に確実に引き継いでいきたいと考えます。在外教育施設で活躍する仲間とつながり、他県の仲間とつながり、豊かな教育の営みを広げていこうではありませんか。



「教室から世界を知る授業づくり」

講師 越宗 ゆう子さん (JICA岡山 国際協力推進委員)

- 1 現地語のあいさつ (スペイン語) アイスブレイキング
自己紹介をいきなりスペイン語で始められた。

今回は、参加者が小学生の立場でという想定でウォームアップのワークショップを行われた。「私は〇〇です。」をスペイン語で紹介され、参加者はスペイン語のまま理解し、スペイン語でお互いに自己紹介を行った。

例 「ゆうこエンカータール」

日系ボランティア制度でアルゼンチンに赴任し、日本との架け橋として、団体事務で派遣された。



- 2 国名で集合 国の数で人数の集合

イタリアだと4文字なので4人組を作る。

チリ (2人) イタリア (4人) エルサルバドル (7人)

インド (3人) アルゼンチン (6人) コスタリカ (5人)

※最後の5人のグループでチームを結成した。



- 3 4つの窓【自己紹介】自己紹介はいきなりするのは、難しいが、何かきっかけがあれば、やりやすくなる。国際理解の視点からは自分のことを知ってもらい、相手のことをよく聞く・知るということも大事にしてもらうために行ったということである。

紙を4つに区切って、次のことを記入し説明する。

I 呼ばれたい名前

II 好きな食べ物

III 行きたい国

IV 私のやっているエコ

※よく聞いてあげることが大切。

例 私のニックネームは「コッシー」です。

好きな食べ物は、お寿司です。

またアルゼンチンに行ってみたいです。

エコは、マイ箸を持って行くことですが、よく飲み会で忘れるので、エコになっているかどうか分かりません。



- 4 グループで「なまず村」を作成。

村づくりを行う。グループのメンバーは、村長さんと村のメンバーになる。まず、村の名前と村長さんを決めた。一人一人の意見をよく聞いて、それをまとめて村づくりを始めた。



村には、川が流れ真ん中に池があり、名物のナマズが捕れる。きれいな水が流れているので、汚さないように気を付けなければならない。学校・公園・道路・住宅・トウモロコシ畑・養鶏場・食品加工工場・スーパーマーケット・レストラン・市場などを、水やにおいなどに気を付けて村の配置を考えていった。



なまず池がある街

街の中心に川が流れ、中央には大きな池。

ここには、上流から流れこむすんだ水に食べておいしいたくさんのおいしい特産なますがすんでいます。この池は、この街に住んでいる人の生活を支えるとともに、きれいな池で釣りや散歩を楽しむ人たちが街の外からもやってくるなど、街のシンボルになっています。池を中心に、この街に住む人たちの暮らしがより良いものとなるように、みなさんで話し合いをしてください。この街で暮らすいろいろな立場の人たちの意見を考えて、みんながなっとくするじまんの街を作りましょう！



どちらを上流にしてもいいです。

川がよごれると街じまんのなますがすめなくなってしまうので、環境を考えながら以下のものを配置しましょう。施設は全て設置します。

- 学校 ● 公園 ● 道路 ● 住宅（家庭排水がでます）

街のなかで働く場所として

- トウモロコシ畑（人間用とにわたりのエサ用）
- 養鶏場ようけいじょう（ニワトリをかう：ふんが出たりニオイもきつい）
- 食品加工工場（ナマズ・ニワトリ・トウモロコシを加工することでより高く売れる：工場排水がでる）
- スーパーマーケット
- レストラン（ナマズ料理が有名で観光客に人気）
- 市場（地元の食材を売る。新鮮で値段が安いので観光客に人気）





5 まとめ

全ての発表が終わった後，8グループの村の川を上流を右側にしてつなげていくと，1つの大きな川の流れができ，川を中心としての周囲に8の村ができあがった。その時初めて気がついたのだが，今まで上流=きれいな水と思っていたのが，実は上流の村から汚い水が流されているということが分かった。自分の村だけを考えていたところ，汚い水を下流の村に流しているということが分かった。つまり，私たちは，地球の一部に住んでいることを実感した。この実践は，環境教育にもなるし，ある学校では，道徳教育としても指導された事例がある。



6 終わりに

国際理解教育の一環として JICA ができることは，させてもらう。こんな国のことを知りたいなということであれば，今までの派遣者で紹介することができる。これからもしっかり活用してくださいということであった。



岡山県国際理解教育研究会 新しい研究課題の提案

1 新しい研究課題

- I 多文化理解〈・人間理解（人権） ・多文化理解 ・世界の現実理解 〉
- II コミュニケーション〈・コミュニケーション ・外国語教育 〉

2 新しい研究課題設定の背景

(1) 社会からの要請

外務省「海外在留邦人数調査統計」によれば、我が国の領域外に在留している日本人の数は、その増加率が減ってきており、放物線の頂点に近づいている様相をみせているという。

しかし、微増とはいえ、海外在留邦人が110万人を越えている状況は、我が国と諸外国とのつながりが深いという事実が変わりはない。

また、いくつかの企業が社内公用語を英語にすると決定したことが大きなニュースとして取り上げられたり、いわゆる「若者の内向き傾向」がとりざたされていたりもしている。

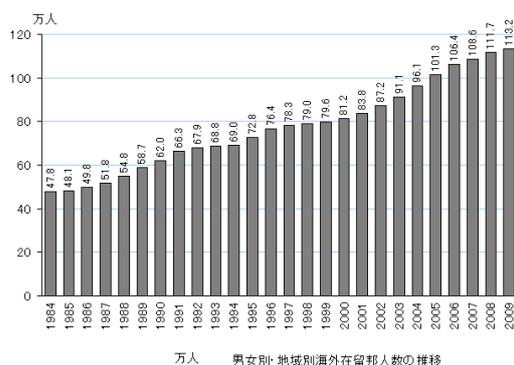
私たちは、すでに「地球規模化=globalization」している国際社会の一員であり、「国際理解教育」なくして我が国の教育は語ることはできないのである。

(2) 新学習指導要領からの要請

中央教育審議会の答申によると、「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる『知識基盤社会』の時代である」と言われている。「知識基盤社会」の特質として、「①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される」などとされている。

そのような「知識基盤社会」を生きる子どもたちが自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ一定の役割を果たすためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・

海外在留邦人数の推移



万人 男女別・地域別海外在留邦人数の推移

資料 外務省「海外在留邦人数調査統計」

表現力等」が必要であると同時に、世界や我が国社会が「持続可能な発展」を遂げるためには「共存・協力」も必要であるといわれている。

「国境のない知識」「グローバル化」「パラダイムの転換」「共存・協力」などというキーワードは、まさしく「国際理解教育」がめざすものと同一である。

(3) 教育現場からの要請

「生きる力」を培う領域として華々しくデビューした「総合的な学習の時間」であったが、「学校行事・イベントの時間としての扱い」「教師の企画力不足」などと、創設当時の元気はどこに行ってしまったのかという感が否めない。「各教科での知識・技能の習得と総合的な学習の時間の課題解決的な学習や探求学習との間に段階的なつながりが乏しい」との指摘もあり、もう一度「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」という「生きる力」について考え直すことが求められている。「総合的な学習の時間」の一領域として例示された「国際理解」についても例外ではない。

(4) 岡山県国際理解教育研究会の研究の経緯からの要請

本研究会は、今まで研究課題を「人間理解（人権）」「多文化理解」「世界の現実理解」「コミュニケーション」「外国語教育」という5つの研究課題を掲げて実践を積み重ねてきた。

その結果、「人間理解（人権）」「多文化理解」「世界の現実理解」の3つのテーマには、「違いを認めるとともに、同じ人間として共感をもってお互いの人権を尊重しようとする態度を育成する」という共通点があり、「コミュニケーション」「外国語教育」の2つのテーマには、「自分の意見や存在に自信をもつためには、他から共感を得たり、互いの存在を認め合ったりすることが大切である」という共通点があることが明らかになってきた。

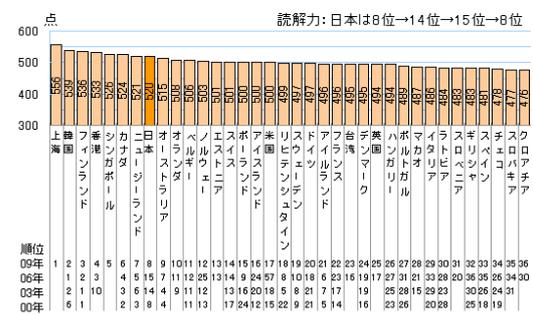
3 新しい研究課題の具体化

前述の背景より、本研究会では、新しい研究課題を「多文化理解」「コミュニケーション」の2つに絞り、新たな実践に取り組んでいくこととした。

各方面からの要請を、実践を通してより確かなものとしていくことが求められている。

「国際理解教育」は、未来を生きぬく子どもたちを育成するために「自己との対話を重ねつつ、他者や社会、自然や環境と共に生きる、『開かれた個』」の育成をめざしてその具体化を図っていく必要に迫られている。

学力の国際比較(2009年)



資料 OECD「生徒の学力到達度調査」2009

<実践発表> 岡山市立平井小学校 坪田 留美教諭

1 本校では、
よりよい自分や集団をめざし、進んで思いを伝え合う子どもの育成
～いつでも だれでもできる 国際理解教育をめざして～
という研究主題で、取り組みをしてきました。



2 本校の概要および、主題を設定した理由についてお話しします。

今年度創立60周年を迎える平井小学校は、幹線道路が学区の中心を走る飲食店を中心に店舗の集まる比較的賑やかな住宅街にあります。児童数は約700名の中規模校です。

連合町内会や安全安心ネットワークをはじめ、多くの方々が環境教育や健康教育など様々な分野で学校に関わってくださっています。また、PTA活動は活発で、役員を中心に自主的自発的に行われていて、保護者も概ね協力的です。

児童は明るく素直で挨拶も良くできます。しかし、お互いの人間関係を良好に築く力は不足しており、心を耕し育てる教育が必要不可欠となっています。

こうした実態をふまえて、本校では、子どもが自分の良さに気づき、自分の考えを持って行動し、集団生活の場としての学校の機能を十分に生かすため、学校全体の研究主題を「よりよい自分や集団をめざし、進んで思いを伝え合う子どもの育成」とし、すべての教育活動の中で研究・実践することとしました。そして、特に心の教育の基盤としての道徳教育に取り組み、研修を重ねていくことにしました。

3 次に、国際理解教育の取り組みについて説明いたします。

国際理解教育は、構えて特別なことをするのではなく、日頃の生活の中から諸外国との関わりを見つけ、違いを認識し、受容していくことから始まると考えました。日本に暮らす外国人と共に社会の中で生きていくことも多い昨今です。広い視野を持ち、異文化や異なる価値観を持つ人々といかに共生していくかを学ぶことは、すでに各学校において各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間あるいは、学校独自の行事など様々な形でとり組まれていることと思います。

こうしたことから、道徳教育同様、教育活動全体を通して国際理解教育にとり組むことは、児童のよりよい自分や集団をめざして、日常的に取り組めることではないかと考えました。

そこで、「いつでも だれでもできる 国際理解教育」をめざし、平井小学校では教育活動全体を通して、どのようなことができるかを模索していくことにしました。

平成8年度中教審答申は 第3部第2章「国際化と教育」において、国際理解教育推進上の留意点として次の3点を挙げています。

- (a) 広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- (b) 国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
- (c) 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

本校ではこれらの留意点をふまえ、次の視点で国際理解教育を進めていくことにしました。

①人権尊重

民族や人種の違いを越え人権や生命の尊さを理解する。

②表現力・コミュニケーション能力の育成

相手の立場や気持ちを尊重し、自分の考えや意志を言葉や身体表現を通じて相手に正しく伝えるとともに、相手の考えや気持ちを受け止める。

③自己の確立

自分自身を見つめることを通して、自分の考えを持ち、自分のよさや個性を大切にする。

④異文化理解

自分とは異なる生活習慣や価値観をもつ人々について知り、これを尊重する。

⑤国際協調・協力への実践的態度

自らが活動に参加し、活動する喜びや人とのかかわりのよさや個性を大切にする。

4 次に、研究の概略について説明します。

(1) 各教科・領域から

各教科・領域において国際理解にかかわるような単元を洗い出して、各学年の学習指導年間計画の中に位置づけました。そして、それぞれの場面において、地図を使って国の場所や文化を知らせて、少しでも諸外国の文化に触れられるようにしました。

具体的な内容は、次のようになっています。詳しくは、別紙を最後に付けていますので、ご覧ください。

- ①国語科 1年生「おおきなかぶ」〈ロシア〉、2年生「スーホの白い馬」〈モンゴル〉、
「かたかなで書く言葉」3年生「三年とうげ」〈韓国〉、ローマ字
- ②生活科 1年生「むかしからのあそびをしてみよう」、2年生「サツマイモをそだてよう」
- ③社会科 4年生「世界とつながる水島の工場」、5年生「外国との貿易」、6年生「日本とつながりの深い国々」、歴史
- ④音楽科 2年生「みんなで1・2・3」、「外国のあそびうた」、3年生「メヌエット」、
「山のポルカ」、5年生「アジアの音楽に親しむ アリラン まつり花」
- ⑤道徳 2年生「せかいのどこかで」、3年生「愛国心と国際理解」、「地球にやさしくくらしよう」、4年生「江戸のエコライフ」、「日本発 世界行き」、5年生「地球を救おう子ども会議」、「宇宙飛行士になったお医者さん」、「ソーリィ」、6年生「世界がもし100人の村だったら」、「二十一世紀をになう若い人たちへ」「エイズと闘った少年の記録」

(2) 外国語活動

コミュニケーション手段の一つとして、外国語は欠かせない言語的活動です。英語ノートには、ハンガール、中国語、フランス語など、英語以外にも扱われている言語があります。また、日本語の中には外来語も多く、二年生の国語で「カタカナで書く言葉」として学習します。こうしたことから、コミュニケーション能力の素地を養い、外国の人と関わる楽しさを体験させたいと考えて、低学年では年間10時間、中学年では15時間の英語による外国語活動を行うように努力しています。高学年では、他校同様に英語ノートを使って年間36時間の

英語での外国語活動を行っており、二学期からは、外国語指導助手と打合せをしながらTTによる指導をしています。

指導のための教材についてはまだ十分そろっているとは言えませんが、音声教材、視覚教材など、題材ごとに必要な指導資料をそろえながら、指導に取り組んでいます。各学年の年間指導計画はおよそ次のようになっています。ご覧ください。これは今年度のもです。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
4	英語であいさつ	英語であいさつ Today's Calendar	英語であいさつ Today's Calendar	英語であいさつ Today's Calendar	世界の「こんにちは」を知ろう Today's Calendar	アルファベットで遊ぼう Today's Calendar
5	ABCで遊ぼう	・月・曜日 ・天気 ABCで遊ぼう	・月・曜日 ・天気 ABCで遊ぼう	・月・曜日 ・天気 ABCで遊ぼう	・月・曜日 ・天気	・月・曜日 ・天気
6			・大文字小文字	・読んでみよう ・フォニックスチャ ンツ	ジェスチャーを しよう	いろいろな文字 があることを知 ろう
7	色で遊ぼう	色で遊ぼう	何色が好き？	色と形で遊ぼう	数で遊ぼう	友だちの誕生日 を知ろう
9	数で遊ぼう ・1～7	数で遊ぼう 1～12	数で遊ぼう	スポーツ ・スポーツチャンツ	自己紹介をしよ う	できることを紹 介しよう
10		顔や体の名前	買いものごっこ ・果物屋さん ・ペット屋さん ・食べ物屋さん	好きなものきらいな もの ・何が好き？	いろいろな衣装 を知ろう	道案内をしよう
11	ハロウィンって なあに？	ハロウィンを楽 しもう	ハロウィンを楽 しもう	ハロウィンを楽 しもう	Let's enjoy Halloween.	Let's enjoy Halloween.
12	クリスマスを楽し もう	クリスマスを楽し もう ・外国のクリスマス	クリスマスを楽し もう	クリスマスを楽し もう	外来語を知ろう クリスマスを楽し もう	行ってみたい国 を紹介しよう クリスマスを楽し もう
1	食べ物の名前 (果物) ・バナナじゃな	食べ物の名前 (果物・食べ物)	目や口を英語で 言おう ・福笑い	福笑いをしよう ・方向 (上下右左)	クイズ大会をし よう	自分の一日を紹 介しよう
2	くて banana チ ャンツ Today's	動物の名前と鳴 き声 ・ Brown bear	・方向 (上下右左)	数で遊ぼう ・1～31	時間割を作ろう	オリジナルの劇 を作ろう
3	Calendar ・曜日	Brown bear What do you see?	今日の気分は？ ・気持ち	・月や日付 ・誕生日	ランチ・メニュ ーを作ろう	将来の夢を紹介 しよう

外国語活動（英語）年間指導計画 ～ 低学年 10時間 中学年 16時間 高学年 35時間 ～

(3) 外部講師との連携

さらに視野を広げたり、関心を高めたりするために、身近な国際交流団体との連携を取りました。

社会法人 岡山県文化連盟 文化人材バンクの出前講座を活用して 片山主計先生に、そして岡山市保健所保健課の出前講座を活用して、五島真理為先生に講師をお願いして授業をしていただきました。その他にも、児童の保護者やイギリス在住のご一家にも協力していただきました。後ほど詳しく説明いたします。

(4) その他

学習の足跡を記録していくことができるように、各クラスに1枚ずつ世界地図を配りました。学習で取り上げた国にシールやマーカーで印を付けていきました。これは、あるクラスのその地図です。

参考文献は、次のようになっています。

- 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」中央教育審議会申（平成8年7月）
- 「小学校国際理解教育の進め方」教育出版三浦健治著

5 2, 6年の実践から、事例を紹介します。

(1) 2年生の実践から話します。 右側の写真に写っている方、お面を付けている方が本校に来てくださっている英語指導助手のディアナさんです。

①イギリスのお友達と遊ぼう～日本の昔遊びを楽しもう～

協力者：熊谷さんご一家です。日本人男性，英国人女性，男の子女の子の兄妹で，イギリスに住まれています。既習の英語のできる英語活動や，生活科での体験が活かせる昔遊びを取り入れて交流しました。

写真

初めて会う子どもたちでしたが、遊びに熱中して、すぐにうち解け、一緒に遊ぶことができました。



折り紙



手遊び歌



ラッキーカラーゲーム

写真の説明

また遊びたい、英語で話したいという感想も多かったが、英語は話せなくても、何とか日本語や身振り手振りで自分の思いを伝えようとする様子も見られました。

②「インドネシア」～アングロンを体験しよう～

講師は、岡山県文化連盟文化人材バンク 片山主計先生です。

内容は、インドネシアの言葉、国の場所、服装、食べ物、動物 について教えていただいたり、楽器「アングロン」の演奏体験をしたりしました。

写真



これがアングロンです。竹でできています。単音の楽器で、振って音を出します



一人一つの音を担当し、心を合わせてみんなで曲を演奏しました。



インドネシアの話をしていただいている様子です。

インドネシア語の簡単なあいさつを教えてもらって、言う方と言われる方で言葉が違うことを知り驚いていました。服装にきまりがあることや、日本と宗教が違うことを教えてもらいましたが、身近なことと受け止められてはいないようでした。食べ物や動物などの写真も多く見せてもらい、食べてみたいと言う感想を持っていた児童も多かったです。

③スーダンにはクリスマスはあるの？～イスラム教の友だちのことを知ろう～

講師は、イスラム教を信仰されている本校の保護者です。お父さんはスーダン人で、お母さんは日本人です。内容は、英語活動～世界のクリスマス～と、イスラム教の国には、クリスマスはあるのかを教えてもらう活動をしました。

写真



国の位置、スーダンの国旗に使われている色の意味、日本と比較した人口密度、気候風土に合わせた服装、など、写真を見ながらわかりやすく話をさせていただきました。



アラビア文字を教えてもらっているところです。。



自分の名前をアラビア語で書いてもらいました。

日本にいながら、イスラム教の戒律をきちんと守って生活をしているご家族の話は、児童にとって驚きだったようです。イスラム教のお友達が、お弁当を持ってきているわけも知りました。

④世界の国々を記録しよう

音楽・国語・生活などの教科や、外国語活動、国際理解教育で触れた国について、見たり聞いたりしたことを世界地図の上に記録して、いつでも確認できるように掲示しました。そのときの写真なども見られるようにして、児童の記憶にとどめておきたいと考えて、取り組みました。

(2) 次に、6年生の実践です。

①熊谷夫妻との交流

協力者は、2年生の実践でもお話しした、イギリス在住の熊谷夫妻です。授業の内容は、英国の生活についてのお話や、英語の遊びを中心としたものでした。

写真



初めに奥様のケイトさんから簡単な自己紹介をしていただきました。家族のことや自分の好きなこと等を簡易な英語で話していただきました。次に英国（ブリテン島）の気候や人気スポーツについて話していただきました。

フットボール（サッカー）が人気スポーツということでサッカーをしている子ども達と英国のチームの話で盛り上がりました。



ご主人とケイトさんと一緒に、簡単な英語を使ったゲームをしているところです。

挨拶ゲーム、自己紹介ゲームをしていただきました。子ども達は、イギリス英語の発音に初めて触れる機会ができたので良かったと思います。初めて出会う熊谷さんご夫妻でしたが、和気あいあいと楽しくゲームをすることができていました。逆に考えると英語だったからこそ話しやすかったとも考えられます。



マン・ツー・マンでそれぞれの児童と簡単な英会話を行っていただきました。

英語の発音を側で聞いたのは良い経験になったと思います。



7月6日 五島真理為先生講義「命輝いて」

1 エイズについて

エイズの AIDS というスペルの意味は AID (助ける) の複数形である。このエイズという言葉は、みんなの「愛」があり、とてもきれいな言葉である。誰もが命を授かった時、両親に愛情のこもった名前をつけてもらっている。一度、自分の名前の由来を聞くとよいだろう。



HIV は人間の体の中でしか生きていけず感染した人の血液・精液・膣分泌液・母乳等に含まれている。従って、通常の生活で HIV に感染することはない。母子感染は帝王切開での出産、母乳のかわりに粉ミルクで育てること等で感染の可能性を抑えることができるようになり、未だ日本では母子感染による患者は発生していない。世界に誇るべき医療水準を日本は維持している。世界で現在までに AIDS で亡くなった人は 4,000 万人にのぼり、昨年でも HIV 感染者は 270 万人 AIDS での死者は 200 万人と推計されている。現在では、HIV の検査方法も治療法も確立しているのになぜこういう状況が続くのか？それは、薬代が高価（一ヶ月 30 万円）なため服薬することができないためである。

2 ライフプランニング

世界には、余命 10 年を宣告され、「10 年も生きられるのか。我々の国では、10 年後のことなんて考えられない。せいぜい 1 年のライフプランニングができれば充分なのに。」という国の人や、HIV の感染の怖さよりも今晚寝るところを求めて体を売っているストリートチルドレンがいる。路上生活を始めてからストリートチルドレンは平均 10 ヶ月で死んだり殺されたりしているそうだ。もともと、病気を持っていなかった健康な子どもたちがストリートチルドレンになると HIV に感染し、毎日寝床を探しながら 10 ヶ月で亡くなるのだ。

3 命の質と長さ

命は全ての人に平等に与えられているが、命の質と長さはどの国のどの家庭で生まれ育ったかによって決まってしまう。日本での平均余命は男性 78 歳、女性 86 歳。私たち豊かな国に住むものが何をしなければならぬかということに正に問われているのである。しかし、患者がいないと治療薬も予防薬もできない。AIDS の新薬を開発するのに、どれだけ多くの患者さんが治療に協力しているか。病人は病気を通して健常者を守る社会の防波堤であり、社会を代表して病気になっているとも言える。無駄な命はひとつもないのである。



講義の後、子どもたちから

- 世界にはエイズに感染している人がたくさんいることを初めて知った。
- 薬が誰でも飲めるようになったらいいのに。
- 命の大切さ、今生きていることの幸せを改めて感じた。
- エイズのウイルスは空気中では生きられないので、普通に遊んだりしてもうつらないということを知りました。近くにいっても特別扱いせずに接したいです。

という感想が出た。エイズという病気について初めて正しい知識を得、世界におけるエイズや命の状況を知り、世界に目を向けるきっかけとなった。

③世界を知ろう1

外部講師は、2年生にも来ていただいた片山主計先生です。

写真



先生が実際にかかわられた国のお話、実際に訪問された国のお話をし
ていただきました。

次に「朝のリレー」というフラッシュを元に世界の国々には時差が
あることについて教えてくださいました。



その後、世界の国々では国旗を大切な物として捉えられていることや
日本の国旗の特徴を見つけていく授業を皮切りに、いろいろな国の国旗
を見て、それぞれの国旗から気がついた事について話し合いをするとい
う演習をしました。各班ごとに自由に国旗を選択し、その図柄や色から
その国の特徴や位置を世界地図を参考に話し合いました。



班でまとめた内容を実際に世界地図を見ながら、説明し合う授業を本
授業のまとめとして行いました。

この授業を元に世界の国々の問題点や貧困の状況について教えていただき「日本人としてできることはないか?」「自分の生活で見直すことはないか?」について考える授業に発展していく予定です。

④世界を知ろう2

子どもたちが自ら課題を設定して、世界のことを調べていきました。

単元計画は次の通りです。

- | |
|---|
| <p>単元「世界を知ろう」</p> <p>第1次 課題を決めよう</p> <p>第2次 計画を立てよう</p> <p>第3次 資料を集めてまとめよう</p> <p>第4次 発表しよう</p> |
|---|

写真



資料を図書館やインターネットで集めたり、集めた資料のどれを使うかをグループで話し合ったりしながら、まとめていきました。



各グループで調べたことを発表しました。
パソコンのスライドでまとめた
模造紙にまとめた
クラスによっては、新聞にまとめる活動も
しました。



授業を終えての子どもたちから、「はじめて知ったことがたくさんあった。」「もっと知りたい。」「次は一人で調べてみたい」など感想が出ました。

5 成果と課題

最後に、成果と課題についてお話しします。

成果としては、まず、外国について見たり聞いたりすることを通して、児童が外国の言葉や文化や生活習慣について知ることができたことです。

次に、楽器の演奏や外国の人と一対一で話をするなどの体験を通して、異文化に触れることができたことです。

そして、知ったことや体験したことを通して、日本との違いを比較し、違いを知って、世界に目を向けるきっかけとなったことや、身近な人との違いを受け入れるきっかけとなったことです。

さらに、外国のことをもっと知りたいと、関心を高めた児童がいたこと、外国の人とも、言葉が通じなくても、何とかしてコミュニケーションを取ろうとする態度を身につけた児童がいたことも、成果だったと思います。

課題としては、どんな活動が子どもの実態により合っているのかを、さらに探っていく必要があること。年間指導計画に、どの場面でどのような触れ方をするのかを書き込んで、より「いつでもだれでもできる」ものにしていく必要があることがあげられます。

今回の取り組みを通して、取り上げて特別なことをするだけでなく、普段の教育活動の中で、意識して子どもたちに外国に触れさせることによって、国際理解教育を進めていくことができるのだと感じました。来年度からも、課題を踏まえて、国際理解教育を進めていきたいと思っています。





() 学校の概要

和気町は、岡山県の南東部に位置し、吉井川が町を縦断しています。人口 16000 人程で、町内に 2 中学校 7 小学校あります。

和気町立石生小学校は、22年度は全校児童 60 名の小規模校で、児童は、素直で、何事にも前向きに取り組む子が多いです。指示されたことはきちんと行う子が多い反面、さらに自己を高めるといふ姿勢にやや欠ける面も見られます。保護者や地域の方は協力的です。

総合的な学習の時間は、「関わろう人・食・自然」をテーマに各学年、指導計画を元に、計画的に学習を行っています。国際理解は、テーマの中の「人」に含まれ、社会科との関連で6年生の内容に位置しています。ここに関しては、年間計画や指導計画をご覧ください。

子どもたちは、これまでもALTとの関わりを低学年から月1回程度、この中にはアメリカやイギリスといったALTの母国の紹介を聞くなど、外国の生活について話を聞いたり映像で見たりする機会は幾度か経験してきていますが、カナダからの先生の家は資産家で「〇〇先生の家って、広いんだ」とかミネソタから来られた先生の時には「ドーム球場がある（メトロドーム）かっていい」など、異文化を知ることよりも、先生の住んでいたところという理解が大きく、異文化を知るといふものからは若干離れていて、その一端しかありませんでした。

実践発表

それでは、ささやかではありますが、昨年度までの実践を発表させていただきます。6年生の社会科の学習で「世界の中の日本」という単元があります。3学期に学習を行う内容なのですが、この学習に向けての導入的な扱い（複合的な扱い）として、総合的な学習の時間で「身近な外国を知ろう」を行いました。児童は、自分たちで名前を考えて（外国語補助員の先生に、「身近な外国を知ろうを英語で教えて」と聞きに行き、research of the world の力でROW)「ROWタイム」として学習を行っていました。

児童とは遊びの中で、よく、都道府県名クイズや世界の国々クイズ（古今東西・私は誰だしょうクイズ）などをしていました。この学習に近くなってきたときに、子どもたちに「和気町には外国の方っているのかな」と問いかけてみると、いくらか具体的な話題があがってきました。特に保護者の中にグアテマラ出身の方がおられることから、話を聞こうと、この総合的な学習が始まりました。

エンナさんという方で、児童の友達のお母さんで、あまりにも身近すぎて、児童は外国の方という意識はなかったのですが、話を聞くうちに、様々な違いに気づいてきたようでした。

活動は、母国での名前の紹介、国や国旗の由来、文化、特に民族衣装と食などをお話してくださいました。人々の名前には宗教上の名前やお父さんの名前が入っていること、戦いによって独立したことなど日本と大きく違うことに驚きをもちながら聞いていました。また、国旗にも意味があり、空色は太平洋と大西洋の2つの海にはさまれていること、白色は純粋さを表していること、中央のマークはスペインから独立宣言したことの象徴（鳥は自由の象徴であるケツァールの鳥・ライフルは国を守る・オリーブの輪は平和）を表していることを知り、特に、国旗に鉄砲が描かれていることに驚きをもっていました。また、グアテマラからはコーヒーが日本に輸出されていることを教えていただき、両国のつながりの一端を知ることができたようでした。

これは民族衣装を紹介してくださっているところです。こちらは、現地のお菓子のようなものを食べている様子です。これは民族衣装を着せてもらった様子です。児童は、体験できること、とりわけ食する活動があることで興味がさらに大きくなっていくものです。この活動でも、どの児童も初めて食べるお菓子の味に「おい

しい」と言って食べていました。この活動の後の感想でも、“民族衣装が、色鮮やかできれいだった。これだけ編むのは大変だろう。”とか“お菓子がおいしかった。ほかにもどんな料理があるのかな。”など、書いている児童もいました。

こうした活動を通して、児童は「もっと外国について知りたい」という思いが膨らみ、「どの国を調べようかな」「何を調べようかな」など、主体的に学習の計画を考えるようになってきました。グアテマラという児童にはなじみのない国を取り上げたことで、児童は、日本と外国の相違について関心をもったようでした。

調べる国を決める場面では、児童は、知っている国々を羅列していき、児童数以上の国々が出てきました。本来は、児童が関心をもった国を調べることが、児童の学習意欲へとつながっていくのですが、ここで、先ほど述べました社会科との関連ということで、児童に、「日本と関わりの大きな国を調べよう」と助言し、関わりの大きな国はどこか、から話し合わせました。アメリカ・韓国・中国まではすぐにでてきました。野球とかハンバーガーとかでアメリカという意見が、K-POPや近いということで韓国が、服に中国製って書いてあるということに気づいた児童から中国がでてきました。また、社会科でちょうどこの頃、近代史をしていたこともあり、この3か国はどの児童も納得のいくものでした。BSE問題の起こった頃には、オーストラリアという意見を出した児童もいました。〇〇という牛丼屋（すき屋）がオーストラリア産の牛肉を使っているの…ということが話題になっている時でした。その時にはオーストラリアも調べさせたこともありました。サウジアラビアは、児童が知っている国を羅列している時から出てきませんでした。社会科でも「つながりの深い国を取り上げ」となっており、つながりが深ければどの国を取り上げてよいのですが、東書の教科書にはその3か国に加えてサウジアラビアが掲載されていたのと、異文化という面では、最も違いが分かりやすいと考え、取り上げることにしました。遊びの「世界の国々クイズ」の時にはでていたのですが、調べるという対象になるほど知識がなかったので、出てこなかったのだと思います。これは私の方から、石油というヒントを出し、石油がなければ、日本というより、今日からの自分の暮らしが困ることに気づかせ、少し無理やりといった面があったのですが、サウジアラビアを加えさせ、4か国を調べることにしました。

何を調べるかに関しては、児童と話をする中で「この国のことを初めて知る人にわかるようなものにしよう」ということになりました。面積や人口、首都などの国土に関すること・食事や教育などの暮らしに関すること・その国を代表する、または特徴づける有名なものを調べれば、その国のことを伝えることができると話し合い、決めました。そして、その調べたことは、校内で発表会をする、校内で発表するということは対象が下級生である、といういわば出口をはっきりとさせ調べ、まとめさせました。これはその発表風景です。

この学習の中で、一番のネックというか残念だったことなのですが、対象となる4か国の方を招いて、話を聞いたり、児童がインタビューをしたりするということができなかったことです。児童は図書の本やインターネットを活用し、調べたことをまとめていきました。また、サウジアラビアの通貨はなかったのですが、3か国の通貨は校長先生が持たれていたもので、活用しました。児童は、日本の通貨しか見たことがなかったので、大きさの違いやデザインなどに興味をもったようでした。また、オーストラリアやマレーシアの通貨は、紙幣にプラスチックが使われていて、驚いていました。

これから、児童がまとめたものをお見せします。調べたことをそのまま転記している部分はあるのですが、児童が関心をもって調べ、若干なりとも自分なりの考察を加えたものです。ご覧ください。

アメリカを調べたグループです。このグループに野球のスボ少に入っている子がいて、大リーグのチームがある都市を中心に調べていました。このグループは、グアテマラと同じようにアメリカの国旗（星条旗）にも意味があることを知り、人種が多く他者理解をしっかりとしないといけないのではという自分なりの考えをもったりしてまとめていました。

韓国を調べたグループです。このグループには、K-POPの好きな子と、料理が好きで家でも、お菓子作りや料理をよくしていて、将来は料理人になりたいという子がいました。

韓国の料理をとにかく調べたくて調べていたのですが、料理よりも習慣の違いに驚いていたようでした。日本

人と韓国人は顔も体型も似ていて、同じように茶碗や箸を使い、ご飯を食べるので、習慣もよく似ていると思っていたようでした。しかし、茶碗の使い方は日本と正反対で、箸も使い方が違って驚いていました。そこから、外国に行くにはその国のことをしっかりと勉強して知って行かないと失礼なことがあるんだということに気づいたようでした。

中国を調べたグループです。中国はとても近くて身近な国で、よく知っていると思っていたようでしたが、知らないことだらけで、びっくりしたようでした。特に自分たちが中華料理と言っているものは、広い中国の様々な場所のものをまとめて言っているだけで、地域で味付けなども違うことに驚いていたようでした。ニュースで話題だったキャラクター問題に途中から関心が移ってしまったようでした。

サウジアラビアを調べたグループです。もっとも何も知らずにスタートしたグループだったのですが、日本と違い過ぎることに驚きと興味をもって調べていました。また、まとめ方を見ていただければわかるのですが、個性的な児童の集まりだったのですが、宗教（イスラム教）が法律になっていることや、宗教によって食べられないものがあることを知り、また宗教上の考え方の違いで、戦争が起きたこともあったので、サウジアラビアを知るためには、まず宗教を知ることが第一歩だと気付いたようでした。日本はサウジアラビアからたくさんの石油を輸入していることから、両国が理解し合い、仲よくしていくことが大切だという考えをもつことができました。

成果と課題

この学習を通しての成果と課題ですが、児童にとって身近な方が外国の方で、その方から話が聞けるということで、不安なく授業に臨めたように思います。その際、民族衣装を身に着けたり、外国の料理を食したり、国旗の由来を聞いたりすることで異文化や歴史に触れ、“外国”に対する見方が広がったように思います。

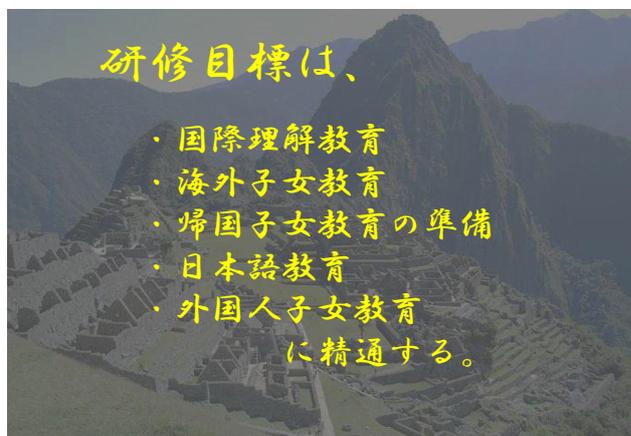
児童はこの学習を通して、外国について興味を深め、調べた国以外の国にも興味をもち、調べたいという思いをもつようになってきました。また、外国を調べることで、日本を見つめ直すきっかけができたようにも思います。なお、この後の社会科の学習では、この学習に引き続き、人々の生活で調べ残していたこと、例えば、どんな授業があるか（韓国は調べていたが）とか、学校での生活などを調べました。また、関わりにおいては、何を輸出入しているかなどについても調べました。こうした学習を通してさらに異文化や習慣を理解することができたと思います。

導入時に外国の方と触れ合う体験をしましたが、それ以外の活動の中で、触れ合うという活動ができませんでした。調べ学習も図書やインターネットが中心となり、実体験を通して学習することが不十分であったように思います。調べた国の方と触れ合う中から、その国を理解していくという活動を取り入れることができれば、さらに学習が深まったのではないかと思います。今後、さらに綿密な計画を立て、様々な外国の方と交流がもてるような体制を作っていくことが大切であると感じました。



「国際理解教育の現状と、海外日本人学校・補習校の様子」

世界を見てきた派遣教員の、国際理解教育への実践についてお話しします。



私たちは、ただ旅行に行って観光地など目立ったところを見てきたということではなくて、実際の生活の場を経験してきたわけです。まあ、いろんなことを見てきているわけです。そんなみなさんは、在外教育施設で素材を収集できましたか。映像をたくさん撮られた方も多いことと思いますが、映像素材作成にあたっては、明確な目的の提示が必要です。そういう意味では、スナップ写真などは厳禁です。また、国際理解教育で気をつけなければいけない次のような点は、配慮できましたか。

- ・ 国別、民族別比較教育
- ・ 見下げた援助や支援は排除
- ・ 人間的視点で、工夫している点

帰国後の成果還元は、次のような場で、できているでしょうか。

- ・ 在籍校教師へ
- ・ 研究会等での同一行政内教師へ
- ・ 児童生徒へ
- ・ 地域社会へ



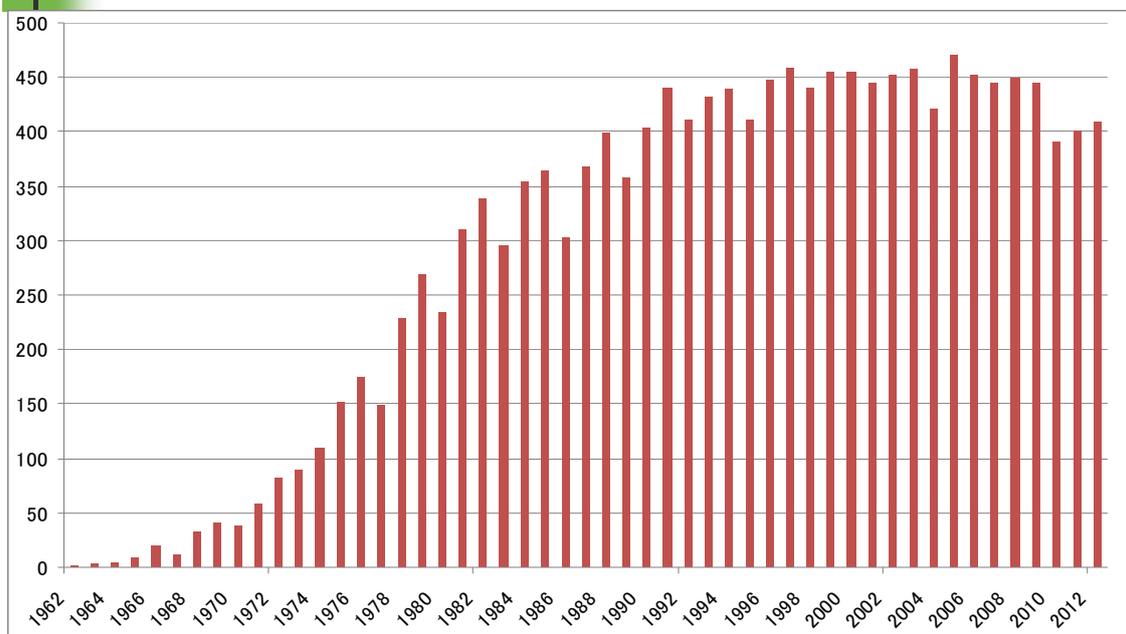
カナダの国道（ずっと見えても20km）



リオのキリスト像（テレビ塔から撮影）

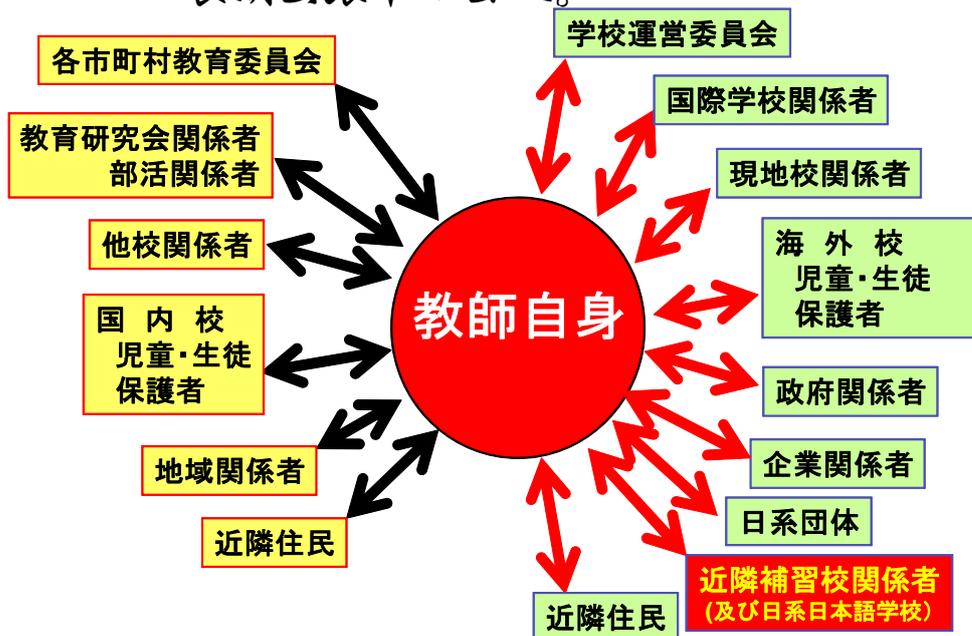
今年も400人以上の先生方が海外に派遣されます。毎年の派遣教師の推移は次のようになっています。

1, 派遣教師

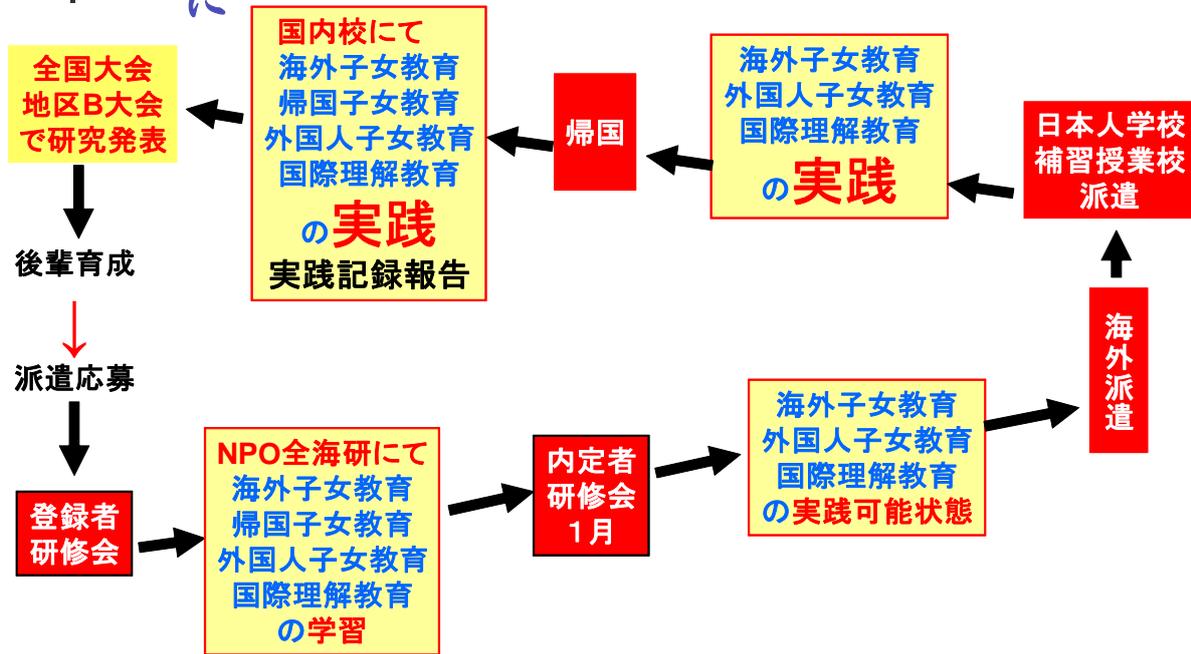


1, 派遣教師の環境は

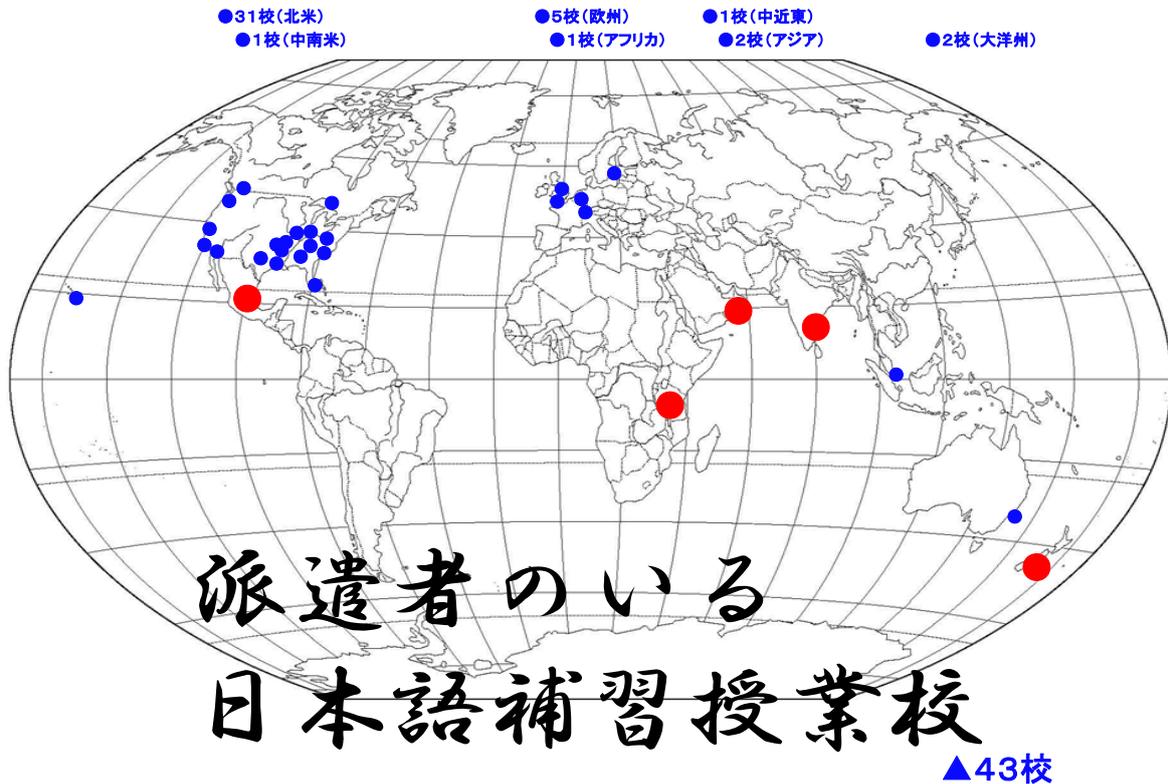
・長期出張中の公人。



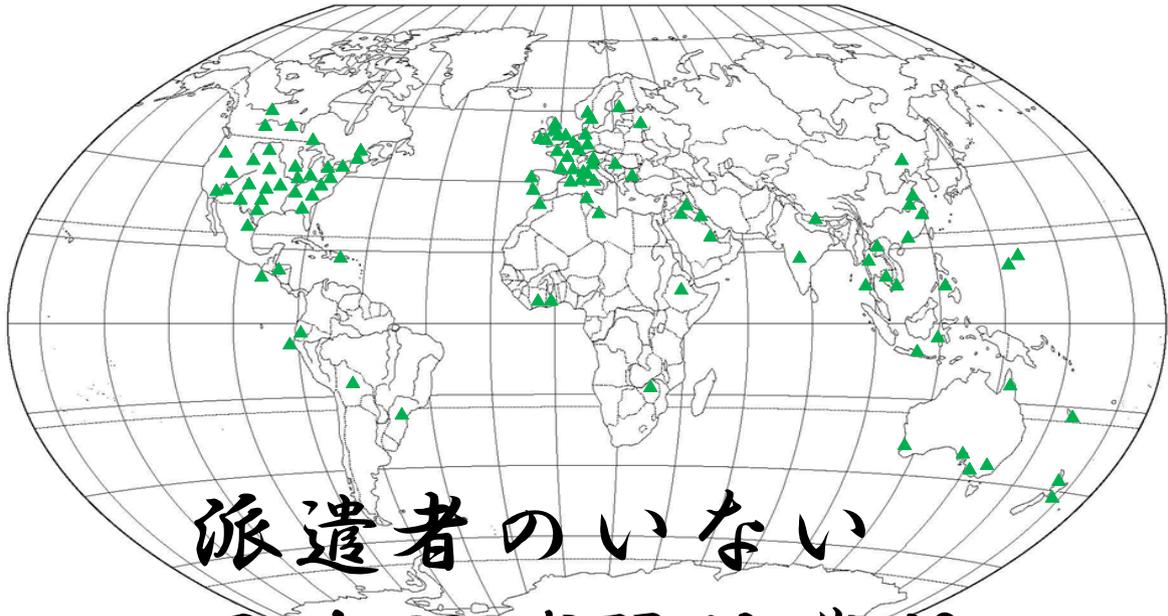
帰国後も「継続する」教師 に



次の地図は、世界の補習校の様子です。もし、旅行などで行けたらぜひ寄ってあげてください。大変喜ばれると思います。



▲56校(北米) ▲57校(欧州) ▲5校(中近東) ▲9校(大洋州)
▲8校(中南米) ▲7校(アフリカ) ▲16校(アジア)

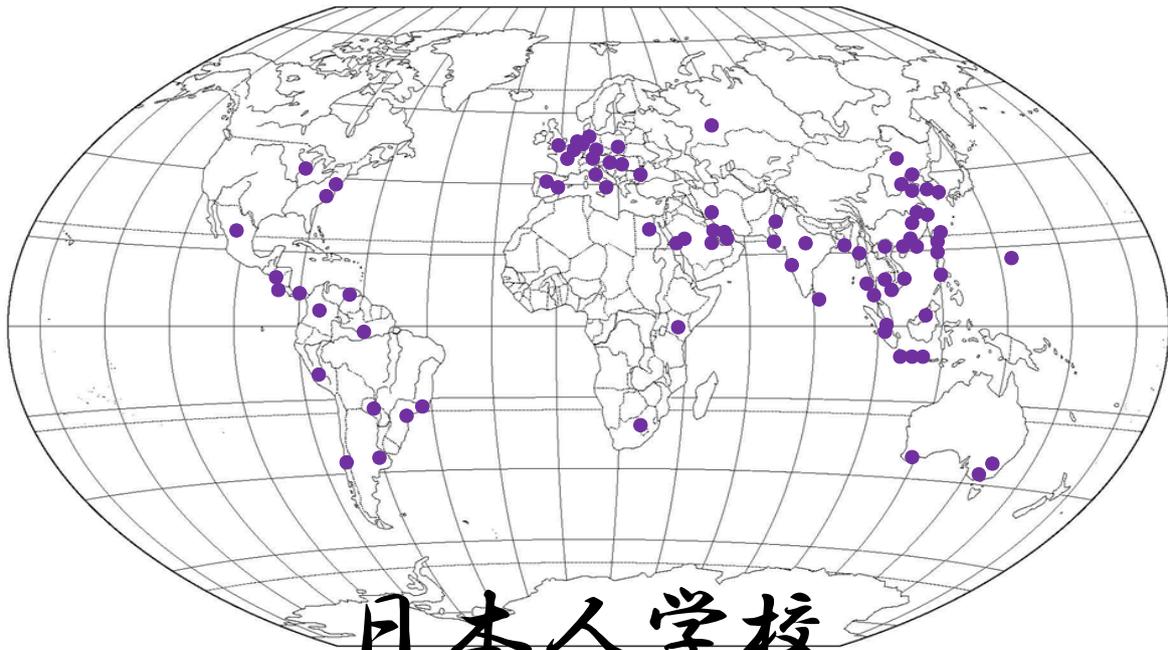


派遣者のいない 日本語補習授業校

▲158校

世界の日本人学校の様子です。

▲4校(北米) ▲22校(欧州) ▲8校(中近東) ▲3校(大洋州)
▲14校(中南米) ▲3校(アフリカ) ▲35校(アジア)



日本人学校

▲89校

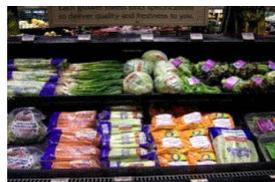
教育の大事なことは

動 執 生 疑

どう しゅう しょう ぎ

- ・ 執着している心を揺り動かしさせ、疑問・疑いを生じさせる
- ・ こりかたまった思考法を溶解させ、新たな疑問を持たせる。
新たな柔軟な思考回路を形成させる。
- ・ 自分で知りたいなあー、という気持ちを持たせ、興味を広げる。

海外派遣経験者が、全て国際理解教育を推し進め、経験を還元していたなら、日本の子どもたちは世界に通用する素晴らしい教育ができていたはずですが、残念ながら多くの派遣経験者が、埋もれてしまっています。ぜひ、下のような貴重な静止画・動画などの資料素材を、全海研のホームページを利用してストックさせてください。



どうぞ、今までの経験を生かして、児童・生徒に「あたたかい教育」を、さらにあたたかい教職員関係を構築してください。みなさんの、地元でのご活躍をお祈りしています。

今回は、日本とマレーシアの大きな国際交流行事である『盆踊り大会』についての御報告をさせていただきます。

『マレーシア 4万人の盆踊り』

クアラルンプールでは、毎年7月中旬に、日本人会、日本人学校、大使館が中心となって運営する盆踊り大会が開催されており、今年で第35回を迎えました。この盆踊り大会は、日本でも類を見ないような大規模なもので、会場の真ん中には大きな櫓(やぐら)が設置され、約4万人もの人が何重もの輪になって踊ります。この4万人という人々の数は、2010年の在マレーシア大使館調査による在留日本人の数は約9,700人であることからわかるように、日本人の数ではなく、現地の方々の数であることが注目される点です。櫓の上では、日本人学校の中学3年生が、太鼓をたたき、交流のある現地校の生徒たちと共に浴衣姿で踊ります。圧巻なのは、櫓を取り囲む一般のマレーシアの方々が作る輪で、櫓の上から見ると、まるで巨大なバームクーヘンが熱気をあげてうねりながら団扇を振り、音楽と太鼓に合わせて声をあげながら櫓の周りをまわっている様に見えます。まさに、故郷岡山の西大寺の裸祭の時にあがるのと同じ白い湯気が人波の中からあがっているのが見えます。



日本人学校では、この日のために、毎日始業前から下校まで、休憩時間や使える時間を全て使い、太鼓をたたき、踊り、練習を重ねます。本番直前には、現地校数校を日本人学校に招いて本番と同じように太鼓を設置し、一緒にリハーサルを兼ねた練習会を体育館で行います。大会当日は、日本人学校の中学部教員は総出で運営にあたります。たいへん大きなイベントで、準備や練習は大変ですが、自国の文化を、異国にある4万人が取り囲む輪の中心で共に分かち合う経験は、参加する生徒たちにとってはもちろんのこと、私たち教員にとっても大きな感動であり、自国の文化に対する理解と認識を深めることの大切さや、国や人種、宗教や言葉を超えるものの貴さを肌で学ぶ機会となっています。



私自身の最近の日本での経験で、地域の盆踊りが毎年近所で開かれていたのですが、一般の人で実際に踊る人は少なく、婦人会の方や運営委員の方々が踊って見せるショーのような感じに年々なっていました。自分が小さな子どもだった頃には、近所や家族の大人の人が踊っている輪に入ってついて踊り、知らないうちに踊り方も身についたような記憶がありますが、今頃は、子どもたちと大人と一緒に輪になって踊るような場面はあまり見られない気がします。こうして、伝統的な文化が身近なものとしてではなく、特別に保存するような形で守られなければ伝えられなくなるのはとてももったいないと感じます。日本から遠きマレーシアのような異国において、こんなに多くの人たちが盆踊りを楽しんでいることをぜひ、一つの例として日本に伝えたいと思います。自分自身も、古きものの中、日常すぎるものの中に、各民族らしさを受け継ぐ大切なものがあることを忘れず、自国文化にも他の文化にも同じようにそれぞれにとって持つ意味と変化があることを畏敬の念と共に感じていたいと思います。

この盆踊りの様子は、NHKのニュースでも放映されており、インターネットを通じても見ることができます。機会があれば、ぜひご覧ください。また、マレーシアに7月中旬お訪ねになる機会がある方は、足をお運びになれる価値があるものと思います。

ミラノ日本人学校 教諭 三宅 孝明
倉敷市立葦高小学校所属（平成21年度派遣）

ミラノ日本人学校は、創設1976年で30年以上の歴史を持つ日本人学校です。現在在籍児童62人（小学部52人，中学部10人。）で，小中併設の小規模校です。ミラノ市はイタリア北部，ちょうどブーツの上辺りのロンバルディア州に位置し，北部をアルプスに囲まれています。学校校舎はミラノ市内北西部にあります。比較的静かな住宅地域にあり，子どもたちの大部分は学校周辺に住んでおり，徒歩やバス，自家用車による送迎で通学しています。



敷地は日本の一般的な学校に比べると非常に小さく，中庭と呼ばれる20m四方程度の狭い運動場で，小学部，中学部の児童生徒が一緒になって楽しく遊ぶ様子が見られます。教育課程は日本の学習指導要領に準じて行われています。また，イタリア語の授業も行われており，現地職員の指導のもと，子どもたちはイタリア語に親しんでいます。

さて，海外日本人学校の特色として，現地校との交歓会があります。年2回，双方を行き来して互いの国の文化交流を主に楽しいひと時を過ごします。一昨年，2年生を担当し，1年生と合同で交歓会を行いました。

そのときに，現地の先生にイタリアの教育事情についてインタビューする機会があったので，以下，紹介します。

○現地教員

Scuola Elementare Di Via Ugo Pisa 教諭 BARBARA（40代）

○日時と場所

1回目：平成22年1月28日 10:00～12:00 Scuola Elementare Di Via Ugo Pisaにて



【教育課程】

- ・学年始まりは9月，終わりは6月中旬～7月上旬。（9／14～6／12）
- ・休業日はイタリアの祝日と，日本で言うお盆（10／30，11／2），カーニバル（3日間），あとは夏休み（6／13～9／13）と冬休み（12／23～1／7）である。
- ・合計授業日数は年間204日
- ・1コマの時間は学校の中で規定はない。8：30～16：30の間の時間を担任裁量で実施されている。
- ・10時過ぎからメレンダとよばれるおやつがある。簡単なお菓子を少しだけ。（イ

タリアの一般的な朝食は、カプチーノとクロワッサンで軽く済ませるため、途中でおなかがすく。それを補うためである。)

- ・ 昼食は12時半ごろから1時半ごろまで、2学年ぐらいの交代制で実施される。学校から給食がでる。
- ・ メレンダと給食のメニューは、HPなどで公開されている。
- ・ 休憩時間は昼食後にある。掃除の時間はなく、業者が行う。

【教科内容】

- ・ 国語、算数、理科、音楽、体育、お話、イメージを広げて絵にかく、地理、英語。
- ・ 1～5年までは同じ。その後は、技術などが入ってくる。
- ・ 教科内容はイタリア政府が規定している。
- ・ 英語はずいぶん前から行われているが、話せるようになっているとはいいがたい。内容は簡単な挨拶とか数字とかである。

【行事】

- ・ 入学式、卒業式などはない。始業式、終業式もない。
- ・ 幼稚園から小学校に上がってきたときに、一緒に遊ぶような会はある。(1年生を迎える会のようなもの)
- ・ 林間学校はある。これはミラノ市が主催しているもので、参加は担任裁量である。
- ・ 避難訓練は年間3～4回ある。今年は11月と5月だそうである。
- ・ 健康診断は昔はあったが、今はない。理由はお金が高いからである。日本は税金でまかなわれるが、
「税金は官僚の懐に入っているのです、こちらにはほんの少ししか予算が付かない。」
と、冗談交じりで言われた。

【資料】

・ イタリアの筆箱



・ 交流会の様子



・ 事務室前の飾り



・ 給食の様子



・ クリスマスの飾り



ワシントン補習授業校での現況報告

ワシントン補習授業校
校長 斉藤 輝三

ワシントン補習授業校の概要

ワシントン補習授業校は1958年に開校された世界で一番長い歴史を持つ補習授業校です。開校当初は大使館の一室を借りて授業を行っていましたが、現在はメリーランド州とバージニア州に3つの私立校の校舎を借用しています。幼稚部、高等部も併設されており、現在園児・児童・生徒数は620名です。週一日土曜日6時間の授業を行っています。遠くは2時間以上の時間をかけて通学する児童生徒もいて本校への期待の大きさを感じずにはられません。子どもたちは月曜から金曜まで現地校に通い、現地のカリキュラムで英語を言語として学んでいます。在籍する児童生徒の多くは駐在員として派遣された保護者に伴って長期滞在している子どもたちですが、近年の傾向として永住予定の家庭の子どもやアメリカで生まれ育っている子どもが増えています。補習授業校設立の主旨は円滑に日本に帰国できるように、日本の学習指導要領に基づいた教育を施すことにありますが日本語力の差が顕著に表れ、子どもたちへの指導に担任がとまどう現状があることも否めません。国際感覚を身につけた、人間性豊かな児童・生徒の育成を目標に日本の学校の学習習慣、生活習慣などを尊重した教育を行っています。年間42日の授業日です。この限られた時間の中で国語科、算数科（数学科）、社会科（低学年は国語科、算数科、合科）を学習指導要領に則って行っています。

日本語イマージョン教育が行われています

バージニア州には日本語イマージョン教育を実施している学校があります。そのうちのひとつグレートフォールズ小学校を参観する機会に恵まれました。そのプログラムは希望者を各学年一クラス編成し、授業はもちろんすべて日本語で実施します。授業のはじめにアメリカ国旗に日本語で忠誠を誓うという珍しい光景に出会いました。各学年の授業参観をさせてもらいましたが、参加している子どもたちの学力は高く、それぞれの学年で一生懸命日本語に取り組む姿を見て、日米の子どもたちの将来に思いをはせ、大変心強く感じました。

北米東部地区補習授業校の集まり

北米東部地区補習授業校現地採用教員研修会並びに連絡協議会の幹事校としてワシントン補習授業校がお世話をしました。3日間日本大使館旧大使公邸を会場に開催されました。現地採用講師研修会では派遣教員のいない補習授業校から先生方が参加され大変熱心な研修会となりました。講座の1コマを当校の現地採用教員が発表し、参加者を生徒にみたくて作文指導の具体的な授業を行い大変好評でした。

連絡協議会では各校の実態と課題が出され熱心な情報交換が行われました。それぞれの補習校がいろいろな課題を持ちながら課題解決のために努力されていることを改めて認識し、有意義な協議会となりました。

補習授業校派遣教員研究協議会も開催

派遣教員のいる補習授業校は世界に39校あります。補習授業校の派遣教員が「補習授業校における経営及び運営の実情についての情報交換や今日的課題について研究協議を行い、各補習授業校の改善・充実に資する。」ことを目的に年に一度開催されています。昨年度はワシントンが担当校となりお世話しました。文部科学省・外務省・海外子女教育振興財団・全海研からもご出席くださり、充実した研究協議会となりました。藤崎大使が記念講演をしてくださったり、大使公邸で情報交換会を開催してくださったり、思えばいろいろな会議や催しの度に大使館職員の方々には大変お世話になっています。皆さんあらゆる便宜を図り、補習校のために協力してくださいませ。本当にありがたいことです。感謝の一言に尽きます。

みんなの手作りによる補習校

子どもたちの学力をつけるためには教員の質を向上させることは当然のことです。当校では現地採用教員の充実をめざして授業研究会や職員研修会を実施しています。毎授業日の学習指導計画作りを定着させ、毎授業日指導案に目を通し、各学級の授業参観をします。周到的準備をもとに限られた時間で中身の濃い授業をしている先生方の努力のおかげで、子どもたちは落ち着いた態度で大変熱心に授業に取り組んでいます。子どもたちは週一回午前中は2時間、午後は4時間の補習校の授業をととても楽しみにして来ます。昼食はカフェテリアや体育館で一斉に食べます。みんな弁当を持ってきます。昼休みはグラウンドで走り回り友達と楽しいひとときを過ごしています。いつ子どもたちにあっても楽しそうに生き生きと顔が輝いています。この子どもたちの笑顔を見て私も勇気づけられます。

学校を支える大変大きな力の一つは保護者のボランティアです。教務と会計以外のほとんどの学校運営にかかわる業務は保護者が担っています。学校を実際に管理している運営委員会、校舎代表、教室代表、安全指導当番、教室当番、図書ボランティア、コピーボランティアなどすべて保護者によって構成されており文字通り保護者が学校を支えています。また、運動会などの季節ごとの行事も保護者のボランティアなしには成り立ちません。どこの補習校でも同じことですが、子どもたちの幸せのために皆が力を貸してくれることのありがたさを常に感謝しながら子どもたちを育てていきたいと思っています。

写真の説明

入園入学式・1学期終業式・小4の授業風景・藤崎大使をお迎えしての運動会・日本語イマージョン教育の様子・借用校でのインターナショナルナイトの様子・幼稚部遠足（動物園）・補習授業校派遣教員研究協議会



天津の街の様子



もうとすると、大多数の一般社員が月収3000元から5000元ですから、何年ローンを組めばよいのでしょうか。先にお金持ちになった人が投資目的で購入して、賃貸に出すというのが一般的みたいです。経済格差はどんどん広がって、この先どうなることやら。

日本がかつて経験した不動産バブルが、その何倍もの規模とスピードで進行しています。市内中心部はもとより、ドーナツ状に外へ外へ、建設は広がって行っています。ただ、1平方メートルが中心部の一等地で2万元以上、校外のバスも運行していないようなところでも7000元が下らないような価格です。マンションの内装前の価格です。土地はそもそも国家からの借り物ですから、日本と仕組みがちがいます。100平方メートルのアパートに住



車が並ぶすぐ近くで、大勢の建設労働者が道端の路肩に座り込んで食事を取っている風景が見られます。すさまじいコントラストです。

市内中心部の一角を写しました。低く見える手前の古いアパート群の外側に、比較的新しいビル群が林立しています。破壊と建設のスピードはすさまじいです。戦前の外国人居留地・租界の建物が一番手前に残っています。ほとんどが借家に出されていて、画面の一番前はレストランや政府機関が入っています。高級レストランの前の道路には、夕刻になると高級車が道一杯に駐車しています。ドイツ、日本のメーカーなど、雑誌でしか見たことのなかった



はこの一年で50パーセントを超すのではないのでしょうか。少しでも安い食材を探す退職者を満載したバスの横をポルシェがクラクションを鳴らしてすり抜ける。そんな光景も見られるのが、今の天津です。

上の写真の左奥に見える古いアパート群の一角です。資産価値が10倍になった人々は、年収の数倍出して車を購入します。一般的な日本人の感覚ではわかりませんが、電気・水道・公共交通機関などの価格は政府が低く抑えていますから、最低必要な生活費は日本の1割程度で済みます。要領よく稼いだ人は車につぎ込むのでしょうか。昭和40年代後半のモータリゼーションの時代を思い出しました。ただ、食料品の価格上昇ペース

天津日本人学校 木村

シラチャ日本人学校の概要について

シラチャ日本人学校 平成 21 年度派遣
岡山市立西大寺中学校 岡 浩史

シラチャ日本人学校は、平成 21 年 4 月に開校しました。私は開校と同時に派遣された教員の一人です。現在 3 年目となります。小規模校ということで、児童生徒のために学習指導や生活指導など、一人ひとりにあったきめ細やかな指導ができます。また小中併設ということで、小学 1 年生から中学 3 年生が共に学んでおり、和気あいあいとしており、互いに仲良く学校生活を送ることができています。休み時間や行事のときには、お互いに力を合挽、せ助け合いながら活動することができています。一方、学校の立ち上げという大切な時期であり、この 3 年間は学校の基盤となるシステム作りに尽力してきました。

タイのシラチャといっても、ピンとこない方もいらっしゃるのでは？と思い、シラチャの街の様子とシラチャ日本人学校の概要を少し紹介します。

1. シラチャについて

- ・バンコクからおよそ 100 km、自動車で 1~2 時間程度
- ・バンコク国際空港（スワンフーム空港）からおよそ 80 km
- ・隣町にはタイ最大の貿易港である「レムチャバン港」がある。
- ・パタヤまではおよそ 25 km、自動車で 30~40 分程度
- ・**夕方になると象の散歩が見られる！**
- ・毎日どこかで大きなタラート（夜店）が出ており、比較的安い値段で肉、魚、野菜、服などが手に入る。



中心地は小さな町である。タイランド湾に面しており、チョンブリーとパタヤの中程にある。1990 年以前は漁村だったので建物・人口も少なかったが、1990 年代以降、周辺工業地帯に日本企業が進出し、日本人居住街となり世界でも有数の日本人街として成長している。

2. シラチャの日本人居住者数とシラチャ日本人学校の児童生徒数の推移について

現在 3,000 人~4,000 人の日本人が居住しているといわれ、多くが周辺工業団地に勤務するためにシラチャに滞在している。市内には、日本人会、日本人学校、幼稚園などもある。2009 年 4 月、日本人学校開校にともない、今後も家族での日本人駐在員が増えることが予想される。

2009 年の開校時の児童生徒は 92 名（小学部 84 名、中学部 8 名）

2010 年度は 136 名（小学部 119 名、中学部 17 名）

今年度 4 月は、 190 名（小学部 161 名、中学部 29 名）

上記のように、開校時から比べて児童生徒数は 2 倍になっており、今後も増加が予想される。

3. シラチャ日本人学校 2011 年度教員数

文科派遣教員 …… 校長、教頭代理、教諭 7 名

専任教員 …… 7 名

4. シラチャ日本人学校の特徴

○校訓

- 広い心で ㊦ 明るく
 ㊧ なかよく
 ㊨ たくましく



○教育目標

1. 日本国民として必要な基本的素養を育み、また国際社会に生きる者としての基本的素養を育む。
2. 変化の激しい社会に対応し、生涯に渡って学習し続けるために必要な、基礎的・基本的な学力を確実に身につけさせる。
3. 知・徳・体・情・意、それぞれが上質でかつそれらのバランスがとれた人間を育成する。

○経営方針

- ・学校経営方針の具現化のために、教職員が心をひとつにして取り組む。
- ・小学部、中学部を併せ持つ小規模校としての優位性を生かす。
- ・日本の文部科学省が定める「学習指導要領」に準じて教育課程を編成する。

○土曜登校日について

小学部1～5年生、中学部1・2年生は月に1回、小学部6年生と中学部3年生は月2回の土曜登校日を設定し、授業時間を十分に確保するように努めている。

○小中併設を生かした指導

- ・小1～中3までのすべての学年で、図工・美術と音楽の専科教員を配置している。
- ・小学部3年生から教科担任制による授業を導入している。
- ・教員一人一人が、すべての児童生徒にきめ細やかな指導を目指している。

最後に・・・

日々の校務も大変ですが、私生活では平成21年8月に、シラチャで長男が生まれました。8月で2歳となります。日々子育てにも頑張っています。

シラチャ日本人学校
教務主任・中学部長
岡 浩史

全校児童生徒が約2600人、職員数は150人超の大規模小中一貫校に赴任して一ヶ月が経ちました。

20mシャトルランができる程の長さのひな壇を使用する職員集合写真や、通学手段であるバス(約100台)への毎日の児童誘導や乗り込み指導など、日本の学校ではまず体験することのない、大変貴重で、そして毎日が分からないことだらけの怒濤の日々を過ごしています。学校のシステムもようやく少しずつではありますが、理解できるようになり、少し落ちついてきたように感じています。

ここタイ・バンコクでは旧正月であるソンクラーン(水掛祭り)が4月の中旬に行われるため土日をはさみ連休となります。こちらの始業式は、その休み明けに行われるので日本よりも少しゆっくりとした始業式となっています。

先月21日にはかわいい一年生、約400名(11クラス)が入学しました。写真撮影だけでも長時間を要するなど、効率よく動かないと、全くまわらない状態となってしまうため自分の役割をよく理解しておくことが必要不可欠です。



今回は5月6日(金)に行われた「1年生を迎える会」について紹介したいと思います。

本番が30秒でも伸びるとバスなど、その後のスケジュール全てに影響が出てしまうので、時間厳守。各学年、持ち時間を絶対に越えないよう時計との格闘でした。また、こちらの学校でも1年生と6年生が手をつないで入場しますが、大きく違うのがクラス数。11クラスが入場しますので、全員が入場し終わる頃には手が疲れてしまうほどです。「ととろ」の「さんぽ」が3回繰り返されました。

各学年が自分たちの持ち味を生かした「出し物」もお馴染みです。今年の出し物は、2年生:AKB48の「あいたかった」、3年生:遠足で行く「サファリワールド」について、4年生:昨年運動会で踊った「エイサー」、5年生:昨年運動会で行った改良版「1年生へのエール」、6年生:組み体操を1年生に披露し、それぞれが一生懸命に学校の楽しさ、すばらしさを伝えました。小学部だけで2000人近い児童が集まります。各学年の出し物も迫力満点!素晴らしい会となりました。



今年のバンコク日本人学校のテーマは「夢」です。夢をもち、夢を語り、夢に向かって進んでいく。そんな子どもたちを育てていけたらと思っています。そして自分も子どもたちの成長という夢に向かって力の限り頑張っていきたいと思っています。

バンコク日本人学校では、夏季休業中に現地校での職員研修が行われます。この研修はタイの北部・南部・東北部の3箇所の学校を年度ごと順番に訪問し、施設などの見学と、現地子ども達にタイ語で授業をするというものです。今年度は二泊三日の日程で北部のチェンライにある3つの学校を訪問しました。



雲海を眺めながら



斜面に建てられている木造校舎

今回は三日目に訪れた標高千七百メートルの山間部の学校での授業について報告したいと思います。この山間部での授業は希望者のみだったので、教員免許があれば配偶者も一緒に授業ができるということだったので、二度とない機会だと思い参加しました。眼下に雲海を見、常夏の国タイであるにも関わらず肌寒さを感じながらの授業でした。

授業は2年生にということでしたので簡単な日本の挨拶と、紙でできる日本の遊び「こま作り・折り紙（かぶと）」をすることにしました。日本では考えられないことですが、はさみやクレパスなどはクラスの数人しか持っていません。ですから、画用紙や竹ひご、クレパスなどの準備物はすべてこちらで用意をしました。もちろん日本語は通じないのでタイ語で授業を進めましたが、

習い始めた私の拙いタイ語ではおそらくほとんど伝わっていなかったのではないかと思います。しかし、こちらが言うことを一生懸命に理解しようとしてくれる児童達に、こちら



2年生のみんなと記念撮影

あっている姿、また完成したもので遊んでいるときの無邪気な表情など、本当にキラキラと光り輝いていました。

今回、現地子ども達に授業をするという機会を通して、学ぶ意欲と、できたときの子ども達の表情は世界共通のものと実感できた研修となりました。

全校児童生徒が約2600人、職員数は150人超の大規模小中一貫校に赴任して一ヶ月が経ちました。

20mシャトルランができる程の長さのひな壇を使用する職員集合写真や、通学手段であるバス(約100台)への毎日の児童誘導や乗り込み指導など、日本の学校ではまず体験することのない、大変貴重で、そして毎日が分からないことだらけの怒濤の日々を過ごしています。学校のシステムもようやく少しずつではありますが、理解できるようになり、少し落ちついてきたように感じています。

ここタイ・バンコクでは旧正月であるソンクラーン(水掛祭り)が4月の中旬に行われるため土日をはさみ連休となります。こちらの始業式は、その休み明けに行われるので日本よりも少しゆっくりとした始業式となっています。

先月21日にはかわいい一年生、約400名(11クラス)が入学しました。写真撮影だけでも長時間を要するなど、効率よく動かないと、全くまわらない状態となってしまうため自分の役割をよく理解しておくことが必要不可欠です。



今回は5月6日(金)に行われた「1年生を迎える会」について紹介したいと思います。

本番が30秒でも伸びるとバスなど、その後のスケジュール全てに影響が出てしまうので、時間厳守。各学年、持ち時間を絶対に越えないよう時計との格闘でした。また、こちらの学校でも1年生と6年生が手をつないで入場しますが、大きく違うのがクラス数。11クラスが入場しますので、全員が入場し終わる頃には手が疲れてしまうほどです。「ととろ」の「さんぽ」が3回繰り返されました。

各学年が自分たちの持ち味を生かした「出し物」もお馴染みです。今年の出し物は、2年生:AKB48の「あいたかった」、3年生:遠足で行く「サファリワールド」について、4年生:昨年運動会で踊った「エイサー」、5年生:昨年運動会で行った改良版「1年生へのエール」、6年生:組み体操を1年生に披露し、それぞれが一生懸命に学校の楽しさ、すばらしさを伝えました。小学部だけで2000人近い児童が集まります。各学年の出し物も迫力満点!素晴らしい会となりました。



今年のバンコク日本人学校のテーマは「夢」です。夢をもち、夢を語り、夢に向かって進んでいく。そんな子どもたちを育てていけたらと思っています。そして自分も子どもたちの成長という夢に向かって力の限り頑張っていきたいと思っています。

バンコク日本人学校では、夏季休業中に現地校での職員研修が行われます。この研修はタイの北部・南部・東部の3箇所の学校を年度ごと順番に訪問し、施設などの見学と、現地子ども達にタイ語で授業をするというものです。今年度は二泊三日の日程で北部のチェンライにある3つの学校を訪問しました。



雲海を眺めながら



斜面に建てられている木造校舎

今回は三日目に訪れた標高千七百メートルの山間部の学校での授業について報告したいと思います。この山間部での授業は希望者のみだったので、教員免許があれば配偶者も一緒に授業ができるということだったので、二度とない機会だと思い参加しました。眼下に雲海を見、常夏の国タイであるにも関わらず肌寒さを感じながらの授業でした。

授業は2年生にということでしたので簡単な日本の挨拶と、紙でできる日本の遊び「こま作り・折り紙（かぶと）」をすることにしました。日本では考えられないことですが、はさみやクレパスなどはクラスの数人しか持っていません。ですから、画用紙や竹ひご、クレパスなどの準備物はすべてこちらで用意をしました。もちろん日本語は通じないのでタイ語で授業を進めましたが、

習い始めた私の拙いタイ語ではおそらくほとんど伝わっていなかったのではないかと思います。しかし、こちらが言うことを一生懸命に理解しようとしてくれる児童達に、こちらも身振り手振りで必死に伝えました。作業が一つできたときの嬉しそうな顔や友達と教え



2年生のみんなと記念撮影

あっている姿、また完成したもので遊んでいるときの無邪気な表情など、本当にキラキラと光り輝いていました。

今回、現地子ども達に授業をするという機会を通して、学ぶ意欲と、できたときの子ども達の表情は世界共通のものと実感できた研修となりました。

モスクワ日本人学校の春夏

モスクワ日本人学校
黒瀬 格

モスクワ日本人学校には、9月12日現在小学部・中学部合わせて120名の児童生徒が在籍しています。校舎はイタリアン校、フィンランド校、スウェーデン校と合同で使用しており、サッカー等のスポーツ交流も行っています。

日本の教育課程以外に、小中全学年でロシア語の授業が行われており、現地採用の講師の指導のもと、ロシア語の元気な歌声があちらこちらから聞こえてきます。

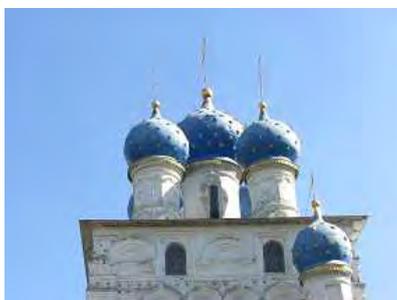
モスクワに赴任して5か月、モスクワ日本人学校の行事を中心にレポートします。



星出宇宙飛行士講演会

モスクワに訓練に来られた星出宇宙飛行士から、貴重なお話を聞くことができました。

モスクワ近郊の「星の町」と呼ばれるところに宇宙飛行士の訓練センターがあり、後日職員研修として訪れました。「星の町」の詳細は、また後日レポートします。



全校写生大会(コロームスコエ)

初夏の風物詩トーポリの綿毛が幻想的に舞う中、ユネスコ世界遺産に登録されている「主の昇天教会(ヴォズネセーニエ教会)」やその周辺の歴史的な建物をしっかりと見つめ、それぞれに構図を工夫しながら、写生を楽しみました。



中学部修学旅行(ポーランド)

本年度の中学部の修学旅行先は、ポーランドでした。修学旅行には、中学部1年生から3年生まで全員が参加します。首都ワルシャワでは、現地の日本人学校の生徒と交流しました。クラクフではアウシュビッツ強制収容所跡を訪れ、戦争の一端を知ることができました。どんな文献よりも、実物の資料は強烈なメッセージを子どもたちに伝えてくれました。



運動会

真っ青なモスクワ晴れの空の下、緑の芝生の上での最高に気持ちの良い運動会となりました。

プログラムには、ロシアのフォークダンス「コロブチカ」があり、児童生徒のみならず、教職員、保護者も参加します。大きな輪を作り、親子や夫婦で手を取り合い、和気あいあいと踊るほほえましい姿が印象的でした。



小学部修学旅行(ウラジーミル、スーズダリ)

小学部では、5・6年生が2泊3日で修学旅行に行きます。総合的な学習の時間に調べた、ロシアの歴史的な建造物を中心に、見学しました。

大都会モスクワから離れ、広大な草原を眺めながら、多民族の侵略から街を守りつつ、独自の文化を築いたロシアの先陣たちに思いを馳せました。

小学部体験学習 いちご狩り

(ソフホーズ・レーニン)

モスクワ郊外のイチゴ農園で、イチゴの収穫を体験しました。子どもたちは、収穫の1割を報酬としていただき、家庭に持ち帰りました。

当日は地元TV局の取材も受けました。

水泳教室 (オリンピック村プール)

学校にプールはありませんが、オリンピック村プールを借りて4日間の水泳教室が行われました。中学部の生徒が泳ぐのは高飛び込み用のプールで、水深が6mもありますが、ロシア人コーチの専門的な指導の下、毎日2時間の練習で泳力を高めました。

日本の裏側で

すばらしい日本語の社会が・・・

～第23回日本語スピーチ大会を終えて～

9月3日（土）、パラグアイ・日本文化センター（アスンシオン人造りセンター）で、第23回全パラグアイ日本語スピーチコンテストが行われました。パラグアイ各地にある日本語学校からそれぞれ選ばれた子どもたちが、アスンシオンにある立派な会場に集まりました。

小学校低学年の部は、お話暗唱です。「かきじぞう」や「おむすびころりん」などの文学作品を6歳から10歳までの子どもたちが、表情豊かに語りかけます。まるで落語を聞いているようでした。あと、小学校高学年、中学生、青年、非日系はスピーチです。思い思いのテーマで、これも表情豊かに自分の考えを主張していました。

他の審査員の方は、午前の部と午後の部とに分かれていましたが、私は、審査委員長として、午前の部（小学校低学年、中学生）と午後の部（小学校高学年、青年、非日系）両方の審査を受け持ちました。ということで、審査会場にはほとんど参加できず、結果だけ聞いたような格好になりましたが、審査委員長として、講評をする役がありました。暗唱や音読の大切さ、自分の主張したいことを具体的事実を交えながら明確にして会場全体の人に語りかけるような態度が必要なことを話しましたが、どの子どもたちも優れており、順位を付けるのにはどの審査員の方も苦勞していました。

合わせて、6月にあった作文コンクールの審査結果についての講評もしました。作文も非常にレベルが高く、多くの審査員の方に感動を与えていました。

多くの日本語学校が、スペイン語の比重が大きくなっている現状の中で、「継承語」としての日本語に苦勞しながら取り組んでいます。今、日本でも暗唱や音読の大切さが見直されていますが、ここパラグアイでその大切さを再認識させられました。



レントゲン

歯医者に通い始めています。日本では歯医者でレントゲンを撮ってくれますが、ここでは、別の場所でレントゲンだけを撮ってもらって、その写真をもってまた歯医者に行く仕組みです。先日、予約していたレントゲンセンターのようなところに行きました。

予約は3時でしたが、バッチリ3時過ぎにはレントゲンを撮ってくれました。どうせ遅れるだろうと思っていたのは大間違いでした。ただ、写真の現像は1日待ってからでした。その場ですぐ結果がわかる日本はやっぱり便利です。ちなみにスペイン語はほとんどしゃべりませんでした。（困った顔をしていたら英語でしゃべってくれました）

日本とつながりの深い街 大連

大連日本人学校 今本洋介

(平成21年度派遣 赤磐市立吉井中学校所属)

「満州」と言えば聞いたことがある人も多いだろう。その満州こそが大連である。かつて多くの日本人が満州で生活したことからも、中国の中では日本とのつながりが大変深い都市である。日本と関わりの深い大連だからこそ、日本の多くの都市と姉妹縁組を行っている。また、日本語を学ぶ人が一説には約20万人いるとも言われ、街には流暢な日本語を話す人が驚くほどたくさんいる。

大連は中国東北部、遼東半島の南端に位置している。気候は、平均気温が11.4℃と過ごしやすいと言われるが、冬には-10℃前後の日々が続くことと海からの寒風で、岡山と比べるとかなり寒いと感じる。

大連の街には今でも日本人が建設した建物がたくさんあり、保管されながらホテルや銀行として大切に利用されている。しかし、街全体は、中国の他の都市と同様に凄い勢いで発展を遂げ、高層ビルやホテル、マンションが次々と建設されるとともに、地下鉄の開通も間近に控えている。また、ユニクロや日系のスーパー、IKEAなど欧米系のおなじみの店舗もあり、生活の不便を感じることはほとんどない。最近では、自動車が増え、朝夕の渋滞も激しさを増している。そんな発展目覚ましい大連であるが、人々は親しみやすく、タクシーに乗れば運転手から気さくに話しかけられ、夏になると老若男女を問わずに、道端に出て夕涼みをしながら和気あいあいとしている。そんな姿を見るとかつての日本がそうであったことを思い出し、大連ではいつまでもこの光景が続いて欲しいと思ってしまう。



過去と現在が混在する街並



建ち並ぶ高層ビル



大連の街のシンボル

大連は、中国でも有数の港と国際空港を有し、貿易の拠点となっている。そのため、日系企業では、約4000社が大連に駐在している。また、日系企業以外にも多く、インテルが大規模な半導体工場を建設し、生産を開始するなど、世界各国の企業が集まっている。

このような大連において、大連日本人学校は今年で開校17年目の学校である。大連市の中心部から少し南に位置し、教室からは黄海を見渡すことができる自然に囲まれた学校である。

大連日本人学校には、小学部と中学部があり、さらに付属幼稚園も併設されており、小学部171名の児童、中学部35名の生徒、幼稚園65名の園児の計271名が毎日元気に登校、登園している。現在は、児童生徒数が増加傾向にあり、今年度から小学部2年生と4年生が2クラスで生活している。



教室から見渡せる黄海

大連日本人学校は、幼稚園の年少園児から中学部3年生までが一緒に生活しているため、縦割り班で活動する行事がたくさんある。そのような行事では、中学部の生徒が班長となり、幼稚園児や小学生のお世話をすることが多いため、中学部の生徒たちには気配りができて心優しい生徒が多く、学校全体に笑顔があふれている。



また、運動会やマラソン大会、校外学習、小学部の学習発表会や中学部の総合的な学習の時間発表会、現地校との交流、キャリア教育講演会など様々な行事がある。これらの行事についても、海外での学校行事だからこそ、一つ一つの行事が日本国内以上に大切に引き継がれ、多くの方々の協力によって行われている。そのため、どの行事でも児童生徒の成長を実感することができ感動的である。行事が終わるたびに、これらの行事はこれまでに大連日本人学校に関わったすべての人の思いによって次へつなげられている伝統であると感じる。だからこそ、その伝統に一つでも二つでも自分のエッセンスを加えることができればと思うことが、日々の仕事への意欲につながっているのだと思う。



運動会での組み体操



現地校との交流会



校外学習で ODA 施設見学

私自身、大連日本人学校に赴任して2年半が過ぎた。今年度は、派遣中2度目となる中3の担任をしている。中学校教員である私にとって帰国生の進路や受験の現状、日本全国にある高等学校や各都道府県の入試制度、海外のインター校などについて知ることができたことは本当に勉強になった。派遣一年目に担任した中3での経験を、現在担任している中3の生徒へ還元すべく日々の学校生活を送っている。これも、一年目に担任した中3の生徒との生活から教えてもらったことを、次の世代へつなげるということだと思う。もうすぐ受験本番を迎えるが、今後も生徒をしっかりサポートしていきたい。

2011年11月

展示物



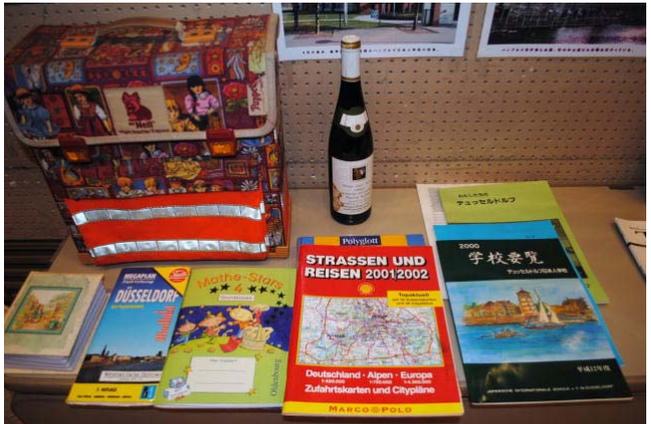
タイ



中国



ドイツ





アメリカ



エジプト



あ　と　が　き

大寒を過ぎた1月22日、研究会場の岡山ふれあいセンターに、厳しい寒さの中、県下各地より多くの先生方に参加いただき、大会テーマ「世界の中の日本　学び合う国際理解教育」を前提とした平成23年度（2012年度）第19回岡山県国際理解教育研究大会が開催されました。

開会行事では、都築会長のあいさつに続き、ご来賓の岡山市教育委員会指導課　岡村富廣様よりご挨拶をいただきました。

研究大会の始めに実践報告として「よりよい自分や集団をめざし、進んで思いを伝え合う子供の育成　～いつでも、だれでもできる　国際理解教育をめざして～」(岡山市立平井小学校　坪田留美教諭)並びに「身近な外国を知ろう」(備前市立伊里小学校　山本和宏教諭)をテーマにお二人がそれぞれの勤務校で取り組まれた活動を丁寧に分かりやすく紹介してくださいました。

次に、全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会より滝多賀雄会長をお迎えし現状報告をしていただきました。滝多賀雄会長は、何を伝えるためにどんな写真を撮るかによって、海外子女教育にも、国際理解教育にもなると言われていたのが印象的でした。さらに、海外から帰国した先生に大きな期待をしていることを強調されていました。

最後に、JICA岡山県国際協力推進員の越宗ゆう子様から「教室から世界を知る授業づくり」と題したワークショップを行っていただきました。終末では、視点を180度転換するような仕掛けがありました。小学生を対象にということでしたので、小学校教諭の中には、早速自分の学校で実践したとの報告も入ってきました。

また、会場のホールには、派遣経験のある教員による各派建国の紹介や物品の展示コーナーも設けられ、各派健康での日々の活動や様子の紹介、派遣教員の海外での活躍棟が広く紹介され、参加者の興味・関心を引きつけました。本会員による派遣相談コーナーも設けられ、派遣希望の先生が熱心に相談していました。是非希望を叶え、私たちの仲間になれることを願っております。

次期平成24年度は、岡山西地区、岡山市立妹尾小学校において第20回国際理解教育研究大会が開催される予定となっています。次期大会の成功と本会のさらなる発展を望んでいます。

終わりにりましたが、本研究大会を開催するにあたり、ご後援いただいた岡山県教育委員会、岡山市教育委員会等、多くの関係機関の皆様、本会役員並びに関係諸氏に心から感謝とお礼を申し上げます。

2012（平成24）年3月1日
編集部部长　和氣　敬二

第19回	岡山県国際理解教育研究大会報告書
発行	2012（H24）年4月1日
発行責任者	岡山県国際理解教育研究会
	会長　都築　勉
事務局	岡山市立中央小学校
	TEL　（086）234-7750

※この研究大会は、福武教育振興財団の助成を受けています。